

# 遼時代壁画墓に 描かれた陶磁器

—宣化・張匡正墓を中心として—

李 含

[キーワード：①宣化遼時代 ②壁画墓 ③張匡正墓 ④備茶図 ⑤備経図]

はじめに

宣化所在地



【挿図1】

河北省宣化地方（挿図1）の遼時代張氏壁画墓は、1974年から発掘調査が始まり、1998年まで十四基の墓が発見されている。

宣化地方の遼時代壁画墓に関する研究は、中国において様々な角度から進められてきた。考古学の面において、河北省文物研究所編纂の『宣化遼墓1974～1993年考古発掘報告』（上下）<sup>1)</sup>及び『宣化遼墓壁画』<sup>2)</sup>があり、他の研究の手掛かりとなっている。墓室天井の天文図について、早い段階から夏鼐氏が論じられた<sup>3)</sup>。社会文化史と美術史学の面におい

て、張鵬氏と李清泉氏の著作からは、比較的新しい研究成果が見られる。張氏の『遼墓壁画研究』<sup>4)</sup>は、各地方の遼時代壁画墓の比較研究を通し、当時の社会文化の特徴を分析し、また美術史の中での位置付けが行われていた。李清泉氏の『宣化遼墓——墓葬芸術與遼代社会』<sup>5)</sup>は、もっぱら宣化地方の遼時代壁画墓に焦点を当て、時代背景、民族関係、美術史学など各方面から宣化壁画墓の特徴を整理されている。

本稿では、宣化地方の遼時代漢民族住民の墓を研究対象とし、さらにその中の張匡正墓を中心として検討を試みたい。張匡正(983～1058)は、張氏一族の先祖として、家族において特別な存在だと考えられる。墓誌からみると、清寧四年(1058年)に一度埋葬されたが、大安九年(1093年)に改めて今の場所に改葬されたことが分かる。張匡正墓の壁画を分析した上、同じ大安九年に埋葬された四か所の張氏一族壁画墓の内容と比較しながら、遼時代晩期における漢民族地方豪族の宗教信仰と価値観、そして什器としての陶磁器や金属器の様相を検討してみたい。

## 一 宣化地方・遼時代壁画墓の概要

### (一) 遼時代の歴史

遼朝ともいい、内モンゴルを中心に中国の北辺を支配した契丹人耶律氏の征服王朝である。916年から1125年まで続き、時間的にみれば、ほぼ北宋時代と並行して存在していた。

遼の政治体制は、遊牧民と農耕民をそれぞれ別の法で治める二元政治である。原則的に、北は契丹族や他の遊牧民族には固有の部族主義的な法で臨み、南は唐制を模倣した法制で臨んでいた。

なお、遼の政権が安定したにつれ、仏教が段々と国教の扱いを受け、社会各方面に強い影響をもたらしていったと考えられる。

## (二) 宣化地方の遼時代壁画墓

### 1. 所在について

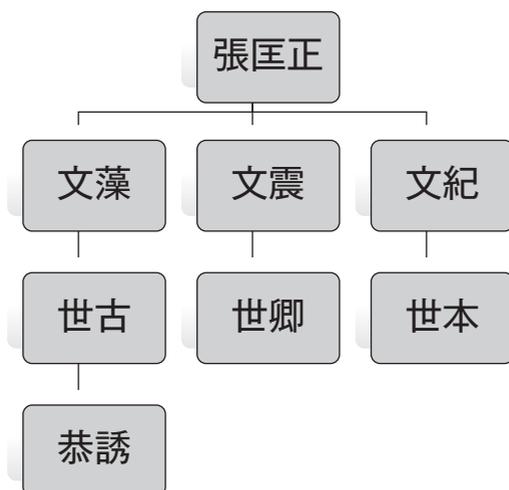
河北省宣化地方は、遼時代において、燕雲十六州の帰化州（唐時代の武州）に属し、南京（唐代幽州、現北京）と西京（唐代雲州、現大同）の間に位置する。張氏一族の壁画墓群は、宣化城西の下八里村にある。

この地域は、魏晉南北朝時代から隋唐以降にかけ、北方遊牧民族の衝撃をもっとも多く受けたところであり、ここに生活していた漢民族は、中原地方の漢民族と違い、常に漢民族の統治者と遊牧民族の統治者の間に、自身の所属を変えなければならなかった。このような生活環境が、宣化地方の漢民族住民に、遊牧民族の特性を色濃く持たせていた所以である。

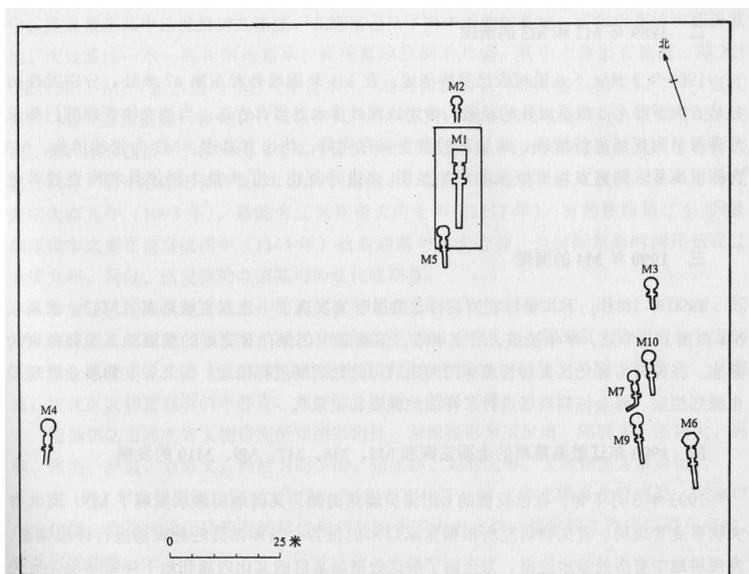
宣化地方の遼時代壁画墓は、遼時代晩期漢民族壁画墓の代表とされており、その中の八基が、張氏家族の墓に当たる。この一連の壁画墓は、概ね前後二つの墓室に分かれ、前室には地上の木製建築に倣い、彩色のアーチ状の入り口、「門楼」が建てられている。後室には棺を置く台があり、木製の棺に経文が書かれ、中には骨灰がある。墓全体は、恰も裕福な家庭の家屋そのものを彷彿とさせる。

### 2. 張氏家族の構成

張匡正は、張氏一族の先祖である。その墓は、張氏壁画墓群の南東にある、ちょうど東区域の中心となっている。張匡正墓（M10）<sup>6)</sup>の周辺には、息子の張文紀、張文震、張文藻、そして孫に当たる張世本の墓が分布している。



【表一】張氏一族系譜図



【図版1】張氏一族壁画墓分布図

| 氏名      | 墓番号 | 没年        | 埋葬年        |
|---------|-----|-----------|------------|
| 張匡正     | M10 | 清寧四（1058） | 大安九（1093）  |
| 張文紀（推定） | M6  | 墓誌なし      | 約大安九（1093） |
| 張文震（推定） | M9  | 墓誌なし      | M7より早い     |
| 張文藻     | M7  | 咸雍十（1074） | 大安九（1093）  |
| 張世本     | M3  | 大安四（1088） | 大安九（1093）  |

【表二】 大安九年前後埋葬墓一覧表

張匡正の墓誌には、「至清寧四年秋八月十八日、寢疾卒於私第、尋權其葬、礼而柩之、公之春秋七十有五。（略）至大安九年歲次癸酉四月丁巳朔十五日辛酉乙時、改葬于雄武本郡之西北。」<sup>7)</sup>との一文があり、張文藻の墓誌には、「咸雍十年二月二十五日寢疾、無何凶變、乃卒。於是尋具哀礼、權其柩。猶子右班殿直世卿、追念其事、與諸同氣議於私第曰、雖室家之事已修、而祖考之塋未遂增広。至大安九年歲次癸酉四月丁巳朔十五日辛酉乙時、改葬于州北之隅、以示孝敬。」<sup>8)</sup>との記載が見られる。張世本の墓誌にも、「有遼大安四年季冬十有七日、卒於私第。（略）至大安九年孟夏乙時、葬於州西北先内。」<sup>9)</sup>と記されている。

これらの記載から、張匡正を始めとする何人かが、一度改葬されたことが分かる。その理由は、張匡正の孫である張世卿という人物が、先祖顕彰のため、同族と相談した上、改めて墓を築き、改葬を行ったからである。

### 3. 墓主の身分

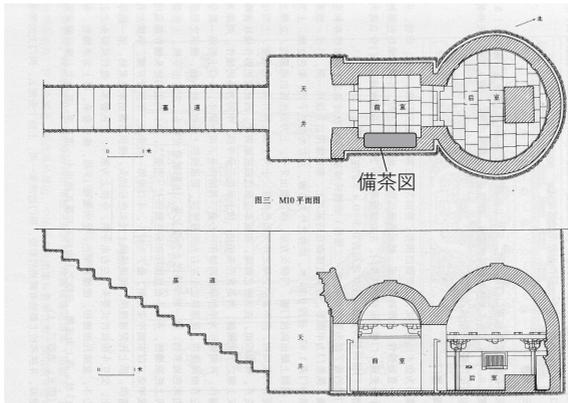
張匡正の墓誌には、「治家事親、動式規矩」という一文があり、家中をよく治め、しきたりに準じて身を持っていたことが分かる。張文藻の墓誌には、「勤勞於家、果致財産饒給、方已具萬。」との記述がみられ、家事に励み、財産を蓄え、既に萬と数える、という意味となる。張世本は、「既勤且儉、庶已克家。雖農務之末、亦嘗親之。至於栽培園果、經營籍産、日有所増」となり、励みながら節約し、謙遜な人柄で、よく家

中を治める。農業のような粗末な業務も、身を持ってこなしていた。果樹を栽培し、果物を育て、先祖伝来の産業を経営し、財産が益々増えていく様子が窺われる。墓誌からみれば、張氏家族が代々当地で農業に従事し、地主として土地を賃貸しながら、果物を栽培し、家財を蓄えていたことが明らかになる。

## 二 張匡正墓壁画の内容及び意味

張匡正壁画墓の略図から、墓の作りが大まかに分かる。墓道という、地上から地下の墓室に至る通路から降りて、高い天井のあるスペースが設けられ、そこに扉があり、向こう側には、前室と後室という、二つの墓室が作られている。壁画は、満遍なく墓室の壁と天井に描かれているが、本稿では、前室の「備茶図」と、後室の「備経図」のみを検討してみたい。

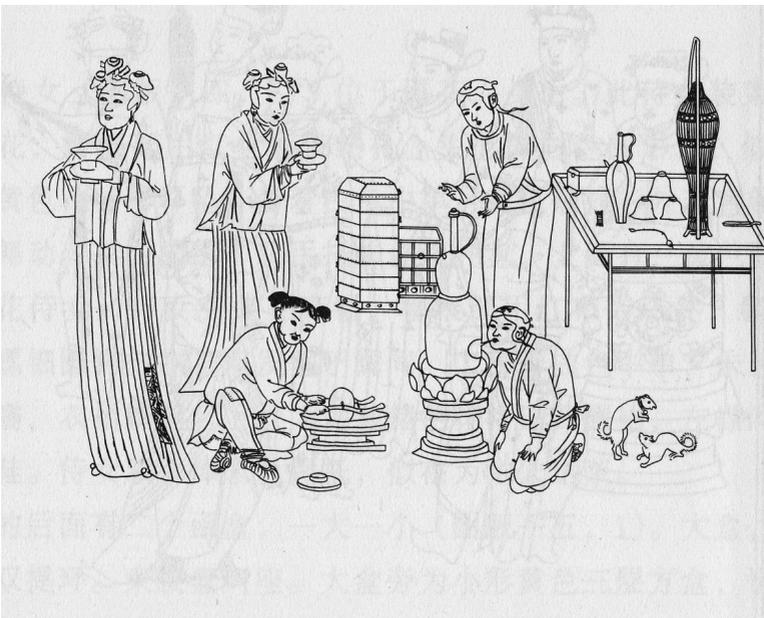
### (一) 前室の備茶図 (図版3・4)



【図版2】張匡正墓略図



【図版3】張匡正墓備茶図181.0cm×152.0cm



【図版4】張匡正墓（M10）備茶図線描復元図

張匡正墓の「備茶図」は、墓前室の東壁に描かれている。  
画面構成について、項目を分けて整理してみた。

### 1. お茶を運ぶ人 (図版3・4)

壁画の左側に女性二人がおり、それぞれ朱漆と思われる天目台に載せてある茶碗を持ち、茶碗は笠形の白磁のように見える。

遼時代に作られた白磁の笠形碗の実物について、参考作品として図版5をあげた。絵釉で、口縁部がわずかに歪みがみられ、高台裏には「官」字款が彫られている。「官」字款からみれば、この作品は恐らく遼の官窯で焼かれたものだと考えられる。張氏一族のような地方豪族が日常生活で使用したものは、図版5に比べると、更に素朴なものの可能性が考えられる。



【図版5】白磁「官」字款碗 同底款  
遼時代(10～11世紀)  
林東窯  
高6.0cm 口径20.8cm  
遼寧省博物館

### 2. お茶を用意する人 (図版3・4)

画面には、三人の子供がお茶を用意する様子が描かれている。

左側には、赤い服を着ている子供が、茶を薬研で磨り潰しており、手前に置かれた表黒裏朱漆塗のお盆の中に、白色の小皿があるが、これは

播られたお茶を入れる容器だと考えられる。

隣にいる二人の子供は、一人蹲っており、風炉の火窓に空気を吹き込んでいる。もう一人は風炉のそばに立っていて、風炉に据えてある湯瓶の様子を見守っている。

また、子供達の右には、二匹の犬が遊んでいる。

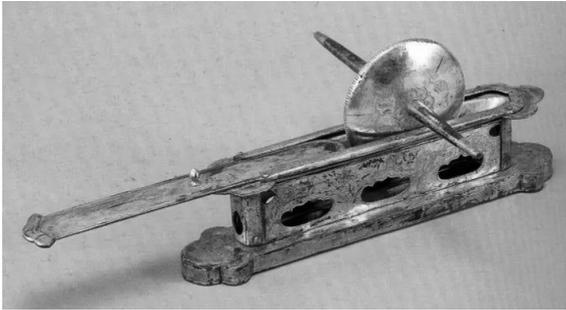
### 3. 茶道具について（図版3・4）

唐から宋時代にかけて、製茶法は大まかに二種類に分けられていた。即ち固形茶と散茶である<sup>10)</sup>。陸羽が『茶経』において、「飲有粗茶、散茶、末茶、餅茶者。」<sup>11)</sup>と書いており、飲に、粗茶、散茶、末茶、餅茶なるものあり、という。ここの「餅茶」は、固形茶の事を指している。「粗茶」は茎と葉片を混ぜて作られた番茶の類で、「散茶」は蒸してから直接乾かして葉のままの茶である。また「末茶」は茶を蒸し碎いてから直接乾燥して作られた茶である。

上述の茶に対して、「餅茶」の製法がもっとも複雑で、手間がかかっていた。「採之、蒸之、搗之、拍之、焙之、穿之、封之」<sup>12)</sup>と、茶芽を摘み、蒸し、搗き、叩き、焙り、穿ち、封をして貯める、という七つの手順を踏んで、漸く出来上がってくる。

製法の難しさもさることながら、「餅茶」を口に運ぶには、その準備もまた複雑である。まずは茶籠の中で温めておき、小さな鋸で飲む分のお茶を切り落とす。次は薬研に掛けて磨り潰し、茶漉しで滓を取り除く。それからお湯を入れ、茶筌などでお茶を点てる。

薬研は、金属、石、木などの材質があり、代表的な作品は、唐時代の法門寺より出土した「鍍金雁雲文銀製薬研」（図版6）がある。宮廷用茶道具なので、作りが極めて精巧であるが、宣化遼時代壁画墓に描かれたものと比べると、使い方は特に変わらないと考えられる。

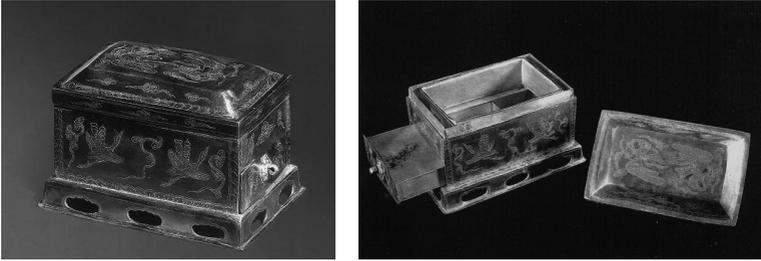


【図版6】 鍍金雁雲文銀製茶研  
唐時代(9世紀)  
高7.1cm 長27.4cm  
法門寺博物館

壁画に描かれた風炉は、色から見れば、茶研と同じなので、恐らく金属製だと考えられる。台座が蓮弁形で、上に据えられた湯瓶は、当時において金属製が好まれるが、陶磁器の写しも多いので、色から見れば、白磁の可能性もある。

画面中央奥の方には、金属と思われる二つの箱がある。一つは、面取り台付きの八段重箱であり、蓋、そして二段ごとに環が付いている。もう一つは、台座付の箱で、同じく環が付いている。二つの箱とも、茶菓子などの食べ物を入れる容器の可能性が考えられるであろう。

画面右側の机の上には、様々な茶道具が置かれている。



【図版7】 鍍金飛天鶴文台座付銀製茶羅  
唐時代（9世紀）  
13.1×8.4×9.3cm  
台座14.4×9.8×2.0cm  
法門寺博物館

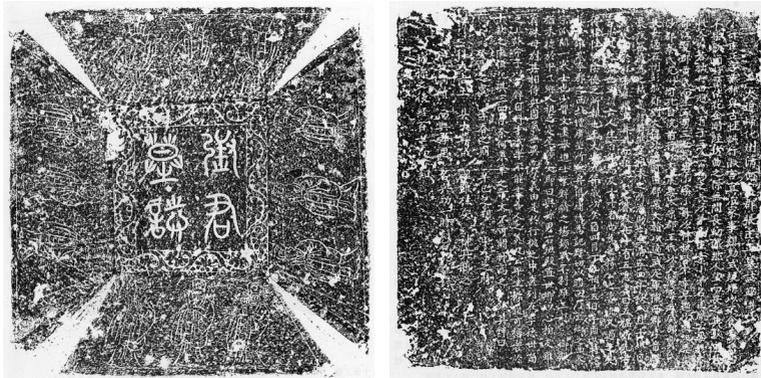
奥の方には、金属の小箱が見えるが、恐らく茶漉しの類と考えられる。類品は、同じく唐時代の法門寺から出土している（図版7）。胴の上部には掛合があり、下には引き出しが設けられ、掛合の網に濾された茶が引き出しから出せるように作られていた。

手前には、左から茶筥、湯瓶、匙、茶盞、竹材長籠、<sup>きっし</sup>鑷子、鋸がみられる。

鑷子と鋸は、餅茶に関わる道具であり、前述のように、鑷子で温められた茶を取り、鋸で茶を切る。

竹材長籠は、中には梅瓶を入れ、保温の容器だという説がある。弦付きなので、運びやすい。文献には「行壺」という名称で記されているが、出土品が極めて少ない<sup>13)</sup>。

墓主の墓誌（図版8）には、「好読法花、金剛経。」との一文があり、張匡正が法華経、金剛経を読むことを好んでいて、敬虔な仏教徒であったことが分かる。



【図版8】張匡正墓誌蓋及び銘拓本  
(左) 蓋長54.0cm 高9.0cm  
(右) 銘長55.0cm 高10.0cm

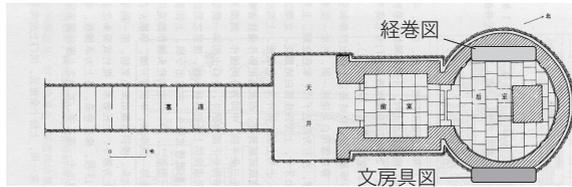
「備茶図」という壁画画題は、唐代以降に出現したものと考えられる<sup>14)</sup>。張匡正墓の「備茶図」をみると、恰も日常生活の一場面のように見えるのだが、果たして壁画墓における備茶図は、単に墓主生前の生活を反映していただけなのだろうか。

唐時代における喫茶風習の伝播について、『封氏聞見記』という筆記の中に記されている。「(茶)、南人好飲之、北人初不多飲。開元中、泰山靈岩寺有降魔師大興禪教、学禪務于不寐、又不夕食、皆許其飲茶。人自懷挾、到處煮飲、從此轉相倣效、遂成風俗。自鄒、齊、滄、棣、漸至京邑、城市多開店鋪煎茶売之、不問道俗、投錢取飲。』<sup>15)</sup> とある。茶というのは、南方の人が好むが、北方の人間は元々多く飲まなかった。開元年間(713～741)に、泰山(現山東省)の靈巖寺の降魔大師が禪宗を興し、禪を学ぶには寝ないように務め、また夕食を食べないため、みな茶を飲むことを許す。人々が自ら茶を持参し、至る所で煮て飲む。ここからお互いに倣い、遂に風習となる。鄒、齊、滄、棣などの各地(現山東省から河北省)より、段々と畿内に及ぶ。都市には多く店鋪が開かれ、茶を煎じて販売するが、修行者か一般人などの身分を問わず、代金

を払えば飲める、という八世紀の様子が窺われる。

この記述からみれば、盛唐時期において、喫茶風習は禅宗信仰とともに、南から山東、河北、そして陝西の長安まで伝わったことが分かる。遼時代の宣化地方は、地元で茶樹が成長しておらず、お茶に関する全ての製品が、南の北宋から輸入されなければならなかったと思われる<sup>16)</sup>。言い換えれば、張匡正墓における日常場面にみえる「備茶図」は、まったく日常生活に関係のない異国の貴重品が描かれており、後述の「備経図」と合わせて、墓主の宗教信仰を反映していたからこそ、慎重に壁画の画題として選ばれ、来世への憧れを含めて、宗教儀礼の一環として描かれていたと考えられる。

## (二) 後室の備経図 (図版10・11)

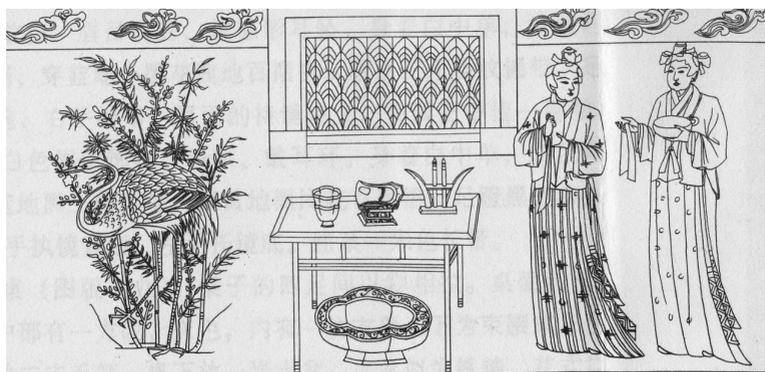


【図版9】M10後室の備経図  
(文房具図及び経巻図)

張匡正墓後室の「備経図」は、東壁に描かれた「文房具図」と、向かいの西壁に描かれた「経巻図」との二場面に分けられている。なお、この構図は、大安九年（1093）に埋葬された全ての壁画墓に共通している。



【図版10】張匡正墓（M10）後室備經図  
（東壁文房具図）  
（西壁と合わせて）240.0cm×100.0cm



【図版11】張匡正墓（M10）文房具図復元図

## 1. 画面の人物

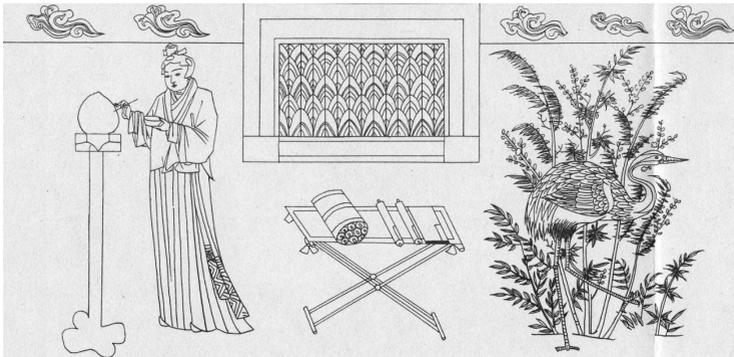
### (1) <東壁>文房具図(図版10・11)

侍女二人がいる。

二人とも髪を高く上げ、髪型を見れば、契丹族の可能性はある。一人が黄釉の盥と手拭いを持っており、もう一人が鏡を持っている。



【図版12】張匡正墓（M10）後室備経図  
（西壁経巻図）  
（東壁と合わせて）240.0cm×100.0cm



【図版13】張匡正墓（M10）備経図線描復元図

(2) <西壁>経巻図 (図版12・13)

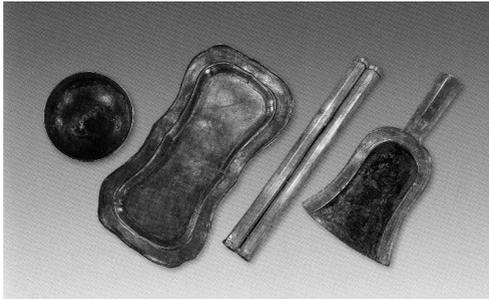
侍女一人がいる。朱漆の燭台の隣に立ち、片手に白磁の油皿、片手に細い棒を持っていて、明かりを付けている。髪型が東壁の侍女と似ている。

2. 器物

(1) <東壁>文房具図 (図版10・11)

四つ足の机の上には、左側から輪花碗が二つ重ねで置かれており、台座付の硯と筆、筆架がある。

机の下には、大きな火鉢がある。



【図版14】銀製文房具一式  
遼時代(10～11世紀)  
(左から)筆洗口径9.6cm、高3.8cm  
筆盆長24.0cm 幅12.9cm 高1.8cm  
筆筒長25.0cm  
硯長21.1cm 高2.1cm  
内モンゴル赤峰市敖漢旗博物館

【図版14】の銀製文房具一式は、契丹族貴族の墓から出土されたものであり、張匡正のような漢民族地方豪族の日用品に比べると、かなり上質なものだと考えられるが、硯の形は壁画のものと非常に似ている。

## (2) <西壁>経巻図 (図版12・13)

左右交差二足の経机の上には、経巻が巻物と冊子との二種類が置かれている。

後室の壁画は、方角に従い、日常生活における宗教儀礼を行う場面を反映している。東壁には朝起きてからの支度が描かれ、盥や鏡などの道具が、顔を清めることを暗示している。文房具は、恐らく仏教の日課の一環である早課における写経の際に用いられる物かと考えられる。

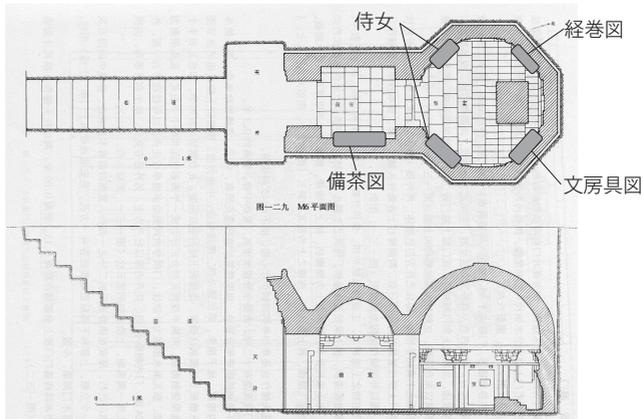
これに対して、西壁には、夕方から夜の読経場面が描かれる。燭台の明かりを付けてから、経巻を紐解き、読み始めることを指す。

## 3. 道教的意匠 (図版10～13)

鶴と花卉が一組ずつ描かれ、両方の机の上には窓がある。

鶴と花卉文は、道教において伝統的な吉祥文様<sup>17)</sup>とされるが、この鶴は恐らく空想上の瑞獣として描かれている。

## 三 大安九年前後の他の張氏壁画墓



【図版15】張文紀 (推定) 略図

(一) 張文紀(推定)墓(M6)の備茶図(図版16・17)及び備経図(図版22～25)

M6壁画墓は、幾度の盗掘に遭ったため、墓誌が出土されなかった。先学は墓の位置から、この墓の墓主を張匡正の三男に当たる張文紀と推定されていた<sup>18)</sup>。

1. 前室の備茶図(図版16・17)

張匡正墓と同じく、墓前室の東壁に描かれている。

(1) お茶を運ぶ人

画面右側に女性一人がおり、髪型からみれば、契丹族の可能性がある。手には朱塗りの天目台に載せてある白磁の輪花碗を持っている。

(2) お茶を用意する人

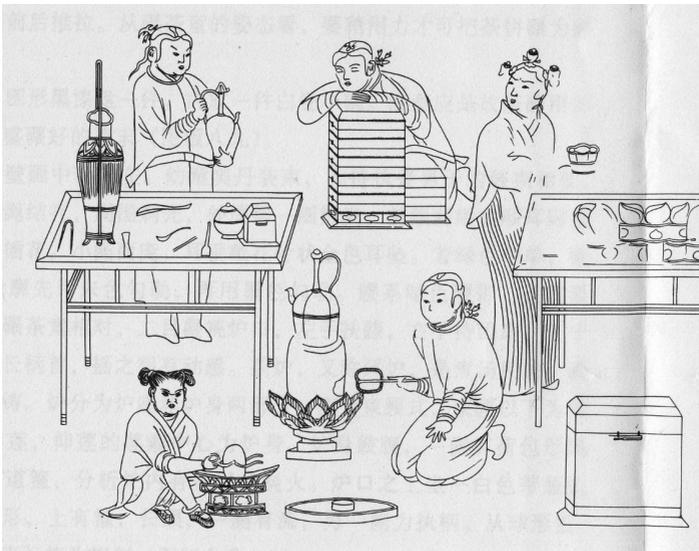
子供三人がおり、左側には赤い服の子供が薬研で茶を磨り潰している。もう一人の子が、小さい団扇で風炉の火を煽っていて、また奥の方には、一人の子がおり、手に湯瓶を持っている。

(3) 描かれた他の人

画面中央奥の方には、重箱に手を載せて、微睡む子供が一人いる。



【図版16】 M6墓備茶図198.0cm×155.0cm



【図版17】 M6備茶図線描復元図

#### (4) 茶道具について

左側の机の上には、様々な茶道具が置かれており、左から鑷子、竹材長籠、篋、鋸、匙、箸、合子、茶漉しがみられる。

ここで描かれた合子（参考図・図版18）は、塩入として使用されていたとの説があるが、遼時代において、宣化地方の漢民族はかなり唐時代の遺風を引き継いでいたので、塩を茶に入れて飲んでいた可能性が確かにある。



【図版18】白釉瓜形合子  
遼時代（10～11世紀）  
口径4.7cm 底径3.2cm 高3.9cm  
遼寧省朝陽市鎮利州城内出土

現存の出土品の材質は陶磁器と金属器とがある。本稿では陶磁器の物を取りあげた。参考図である図版18をみると、非常に素朴な造りとなっており、高台以外には釉薬が施されている。

薬研と風炉は、金属と考えられる。薬研の手前に、表黒裏朱漆塗のお盆があり、中には白い小皿がある。

画面の奥には、金属と思われる二つの箱があり、両方とも重箱に見えるが、左の方は面取り蓋台座付の十段重ねで、環が付いている。

#### (5) 食器類

画面右側に机があり、上には花菱形の重箱が、三段重ねで置かれている。復元図を合わせてみると、重箱の中に瓜や桃のような果物がみえる。重箱の材質について、描かれたものは漆器のようだが、出土品は全て

陶磁器となっている。参考図として図版19・20を挙げておく。



【図版19】  
黄釉印花文重箱  
遼時代(10～11世紀)  
総高21.5cm  
長径14.7cm  
昭烏達盟文物センター



【図版20】  
三彩印花文重箱  
遼時代(10～11世紀)  
総高6.5cm  
長径16.0cm  
昭烏達盟文物センター

## (6) 他の器物

右側手前に、面取り蓋の箱が一つ置かれている。

M6の備茶図は、茶道具だけではなく、食器や果物も描かれていた。果物は茶菓子の可能性があると考えられる。

## 2. 後室の備経図(図版22～25)

M6の後室は八角形となっているため、侍女と机との画面が、離れて描かれている。

### (1) 人物

＜南東壁＞侍女図(図版23)

侍女一人がおり、黄釉の唾壺を持っている。

M6からは出土しなかったが、隣のM7壁画墓からは、実際に黄釉の唾壺(【図版21】)が出土した。壁画と照らし合わせると、器形がかなり忠実に描かれていたことが分かる。



【図版21】黄釉唾壺  
遼時代(11世紀)  
口径16.0cm 高10.8cm  
胴径9.2cm 底径6.0cm  
宣化博物館

＜南西壁＞侍女図（図版24）

侍女一人がいる。朱漆の燭台の隣に立ち、片手に白磁の油皿、片手に細い棒を持っていて、明かりを付けている。

(2) 器物（図版22）

＜北東壁＞文房具図

四つ足の机の上には、左側から書物、硯と筆、筆架がある。机の両側に、青色の花壺が一つずつあり、中には牡丹の花が生けてある。



【図版22】  
M6後室文房具図  
113.0cm×105.0cm



【図版23】  
M6後室侍女図  
92.0cm×105.0cm



【図版24】  
M6後室侍女図  
98.0cm×105.0cm



【図版25】  
M6後室経机図  
109.0cm×105.0cm

＜北西壁＞経卷図（図版25）

左右交差二足の経机の上には、経卷が巻物と冊子との二種類が置かれている。

机の両側に、青色の花壺が一つずつあり、中には牡丹の花が生けてある。

唐時代には、既に花を大きな壺に生ける記載がみられる<sup>19)</sup>が、宣化の壁画墓をみると、遼時代晩期の漢民族は、まだこの伝統を守っていたことが分かる。遼時代の出土品の中から、花壺と思われるものがみられ、実物の色は壁画と違うが、モノクロとなっているので、花を生けても違和感がないだろう。



【図版26】  
白地鉄彩刻花牡丹文罐  
遼時代  
乾瓦窯 (10～11世紀)  
高29.9cm口径23.6cm  
上海博物館

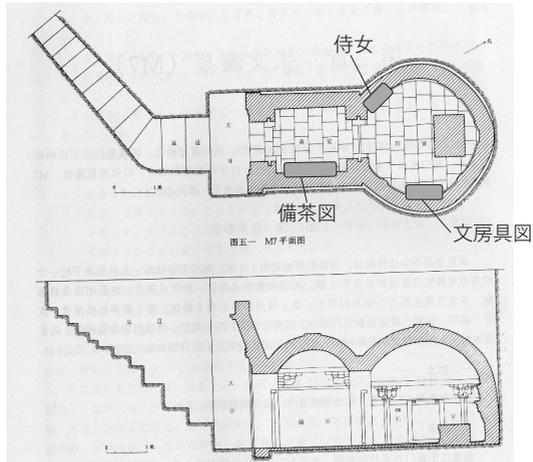


【図版27】  
白地鉄彩刻花牡丹文罐  
遼時代  
乾瓦窯 (10～11世紀)  
高28.5cm口径25.0cm  
喀左博物館

### (3) 道教的意匠 (図版23・24)

鶴と花卉が一組ずつ描かれ、両方の机の上には窓がある。

(二) 張文藻墓 (M7) の備茶図 (図版29・30) 及び備経図 (図版33)

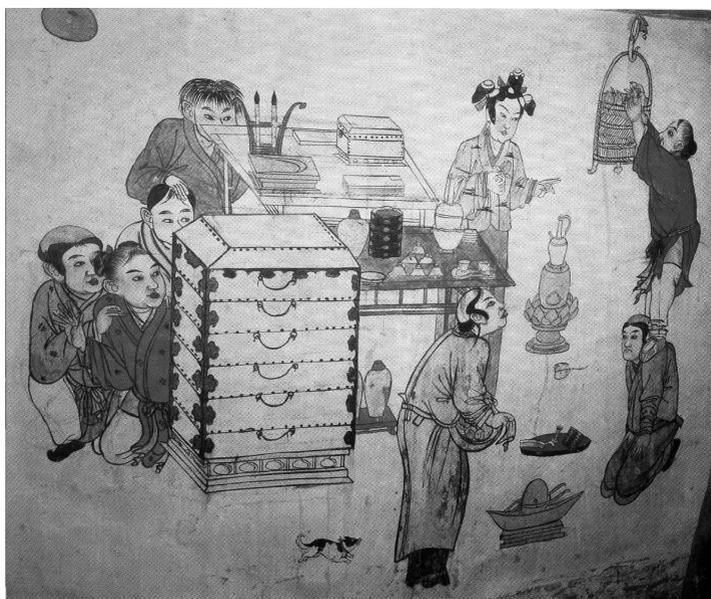


【図版28】張文藻墓略図

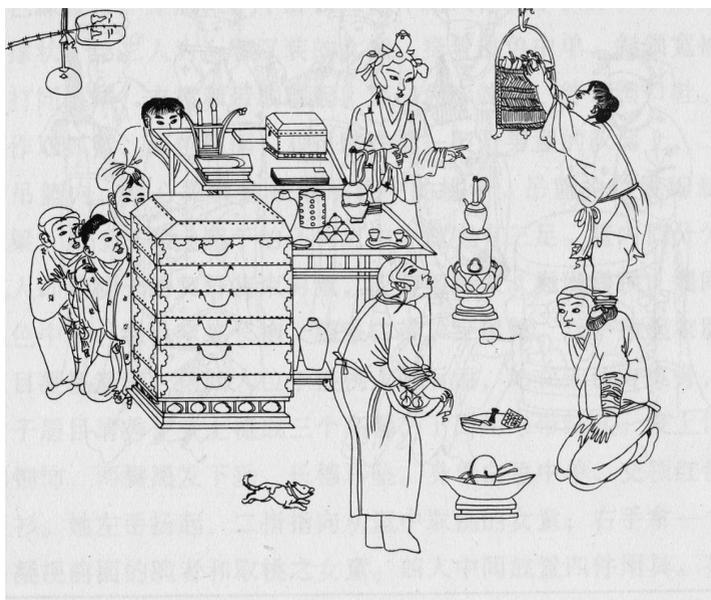
M7 壁画墓の墓主は、張匡正の五男に当たる張文藻である。

1. 前室の備茶図 (図版29・30)

張文藻墓の備茶図は、前室の東壁に描かれている。



【図版29】張文藻墓 (M7) 前室備茶図  
108.0cm×46.0cm



【図版30】M7備茶図線描復元図

(1) 隠れている子供 (図版29・30)

四人がいる。中の三人は男の子で、赤い服を着ている子供は女の子と  
思われる。全員が重箱と文房具の机の後ろに隠れており、他の人を覗き  
見ている。

(2) 桃に関わる人達 (図版29・30)

画面右側に、一人の子供が蹲って、肩に女の子を乗せている。女の子  
は天井から吊るされた竹材の茶籠から桃を取り出し、薬研の左側に立っ  
た子供が服の裾で桃を掬う。

また、机の右側には女性一人が立っており、手に桃を持っている。

この壁画における桃という要素は、恐らくお茶の代用品で、直接お茶  
を用意する場面が描かれない代わりに、茶道具と桃という、お茶の効能  
を暗示する物が登場している。

茶籠の伝世品について、法門寺から出土された宮廷茶道具 (図版31)  
がある。前掲の銀製薬研と同じく精巧な作りで、壁画に描かれたものは、  
明らかに民間の日用品であることが分かる。



【図版31】 鍍金飛鳥文銀製茶籠  
唐時代 (9世紀)  
径16.2cm 高17.5cm 足高2.8cm  
法門寺博物館

### (3) 茶道具について (図版29・30)

葉研、風炉、湯瓶、そして団扇が見える。

また、ここにも表黒裏朱漆のお盆があり、中には茶筌、鋸、そして餅茶が入れてある。

### (4) 文房具の机 (図版29・30)

筆架、硯、経巻、茶濾しが置かれ、お茶を飲みながら、写経している様子が想像される。

### (5) 酒器を置く机と棚 (図版29・30)

朱色の机の上には、蓋付梅瓶、花菱形重箱、承盤付水注、お皿と盞、長盆と杯類があり、下には棚に嵌めてある梅瓶二つが見える。

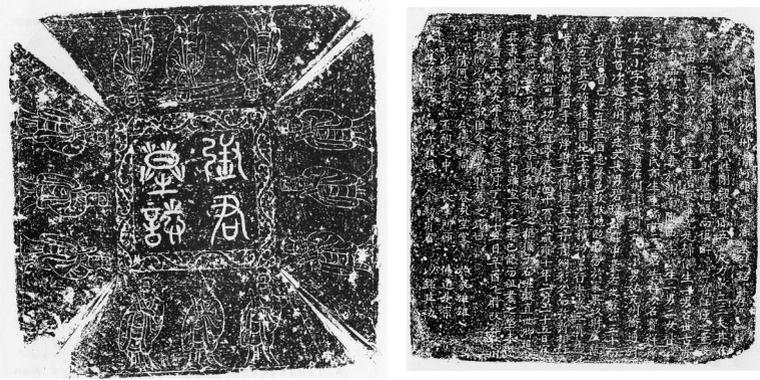
### (6) 他の器物 (図版29・30)

面取り蓋台座付の六段重ね重箱があり、環が付いている。

重箱の手前に、一匹の犬が走っている。

張文藻墓 (M7) の備茶図の画面構成がもっとも豊かであり、写経用と思われる文房具を置く机と、酒器を置く机、そして桃という不老長寿の象徴とされる果物が描かれている。

張文藻の墓誌には、「少則嗜酒。(中略) 公三十而立、乃自省己、遂棄杯酒、遠声色、(中略) 但積功累行、崇敬三宝為業。」とあり、幼い時に酒を嗜んでいたが、三十歳になってから自省し、酒を捨て、道楽から遠ざかり、ただ功德を積み、三宝を敬い、業となしていた。M7の備茶図(図版29・30)には、酒器が描かれることから、墓主生前の生活や嗜好により、壁画の内容が少しずつ変わっていく事が分かる。現実生活を忠実に反映していると考えられる。



【図版32】張文藻墓墓誌蓋及び銘拓本  
(左) 蓋長52.0cm 高14.5cm  
(右) 銘長53.0cm 高10.5cm

## 2. 後室の備経図



【図版33】張文藻墓 (M7) 後室文房具図  
198.0cm × 100.0cm

張文藻墓（M7）後室の壁画は、経巻図の部分に変化があり、経機の画面がなくなったが、前室の備茶図に経巻を置く机が描かれているので、後室の経機が前室の壁画に移動されたと考えられる。

### （1）人物

#### ＜東壁＞文房具図（図版33）

侍女一人がおり、天目台付の茶碗を持っている。台と茶碗が共に白磁に見える。

出土された同時代の類品（図版34）は、総釉で、シンプルな形を取っている。



【図版34】白釉台付茶盞  
遼時代（10～11世紀）  
盞高4.4cm 口径11.0cm 底径4.5cm  
台高6.5cm 口径7.2cm 底径5.5cm  
北京首都博物館

<西壁> (図版35)



【図版35】張文藻墓 (M7) 後室西壁壁画  
198.0cm×100.0cm

侍女二人がいる。一人は朱漆の燭台の隣に立ち、片手に白磁の油皿、片手に細い棒を持っていて、灯りを付けている。もう一人は赤い扉の前に立ち、施錠しようとしている。

扉を閉める侍女という構図が、M6の後室にも見られる。

(2) 器物

<東壁>文房具図 (図版33)

四つ足の机の上には、左側から冊子、硯と筆、筆架がある。

(3) 道教的意匠 (図版33・35)

鶴と花卉が一組ずつ描かれ、東壁の机の上には窓がある。

### (三) (推定) 墓 (M9) 及び張世本墓 (M3) について

張文震 (M9) 墓全体が崩れていたため、壁画の内容を判読できない。

M3は張文紀の息子・張世本の墓であり、単室墓となっている。

後室の壁画は、大安九年に埋葬された他の壁画墓と似ており、文房具図と経巻図が描かれているが、全体的な写真資料が出版されておらず、特に東壁の侍女の写真の存在は確認されていない。考古報告の記述を読むと、東壁の窓の南側に、一人の侍女が立ち、手には茶盞を持っている。隣に一匹の犬が走っていることが分かる。

## 四 まとめ

前室の喫茶図画面において、薬研や風炉、湯瓶などの茶道具が共通の要素として、繰り返して登場する。人物は女性と子供との二種類に固定されている。これは遼時代晚期漢民族の家族認識に深く関係していると考えられる。即ち、女性と子供が家族の中における不可欠な存在であり、男性の墓主が宗教儀礼を行う際に、器物や飲食を用意する立場にある。

後室の備経図画面において、まず共通点が幾つか挙げられる。文房具机と経机が殆どの壁画に登場しており、侍女が不可欠な存在となっている。画面には窓があり、鶴と花卉、そして花壺が配置される。また、朝から晩まで、日常的に家庭内で行われた宗教儀礼の場面の配置について、張文藻墓 (M7) を除き、東壁に文房具図、西壁に経巻図という位置関係が、ほぼ共通している。侍女が持つ盥、鏡、唾壺、手拭い、茶盞などは、墓主が朝起きてからの動きを表す。即ち顔と手を清め、身だしなみを正し、お茶を飲んでから、早課にのぞむ。机に置かれた文房具と経巻は、写経を暗示している。これに対し、経巻図に描かれた経机の隣に、常に燭台の灯りをつける侍女が立っており、これは夕方になってから墓主が経文を読むことを暗示している。ここから、墓室の方角に従い、一

日の時間の流れを表していることが分かる。人物以外の描写については、花壺が必ず一対で描かれており、鶴と花卉という道教の伝統的な吉祥文様も、取り入れられている。

以上からみれば、大安九年（1093）に改葬或は埋葬された五基の張氏壁画墓は、張世卿の主導の下に、同じ工房の絵師の作の可能性が大きい。なお、壁画の制作に当たり、粉本を使用していたと考えられる。

遼時代の陶磁器の様相は、非常に複雑で、今だに使い方が確認されていないものが多い。宣化遼時代壁画墓に描かれた陶磁器を通し、当時用いられた陶磁器の種類と使い方を把握することができる。また、北宋が遼の生活文化に対して非常に大きな影響をもたらしていたが、壁画の内容は正にそのことを証明している。そこに描かれた陶磁器は、遼時代晩期における漢民族豪族の生活様相と遼宋両国の文化交流という研究において、非常に大きな意義を持っている。

#### 【図版出典】

- 図版 1・2・3・4・8・9・10・11・12・13・15・16・17・21・22・23・24・25・28・29・30・32・33・35：河北省文物研究所『宣化遼墓1974～1993年考古発掘報告』（上下）、文物出版社、2001.
- 図版 5・19・20・26・27：中国上海人民美術出版社編『中国陶磁全集17遼代陶磁』株式会社美乃美、1986.
- 図版 6・7・31：陝西省考古研究院編『法門寺考古発掘報告』文物出版社、2007.
- 図版14：劉广堂等主編『契丹風華』文物出版社、2012.
- 図版18：北京遼金城垣博物館編『碧彩雲天一遼代陶磁一』、北京燕山出版社、2013.
- 図版34：北京市文物局等編『遼宋金磁器』北京出版社出版集団及び北京美術出版社、2006.

## 注

- 1) 河北省文物研究所『宣化遼墓1974～1993年考古発掘報告』(上下)、文物出版社、2001.
- 2) 河北省文物研究所『宣化遼墓壁画』、文物出版社、2001.
- 3) 夏鼐「从宣化辽墓的星图论二十八宿和黄道十二宫」、『考古学报』、1976年第2期。天文図について、日本人学者林巳奈夫氏が「中国古代における蓮の花の象徴」(『東方学报』59、京都大学人文科学研究所、1987.) という論文において論じられ、他には欧米学者も論文を書かれていた。
- 4) 張鵬『遼墓壁画研究』天津人民美術出版社、2008.
- 5) 李清泉『宣化遼墓——墓葬芸術與遼代社会』文物出版社、2008. 作者は張氏壁画墓を高く評価し、唐時代の壁画墓の内容と形式を継承しながら、遼時代の遊牧文明の影響をも、反映していると評された。
- 6) 発掘の時間順に従い、宣化地方の遼時代壁画墓の第一発掘区域の墓がM1からM10まで番号付けられている。本論文では、考古発掘報告の番号順に従い記述する。
- 7) 本論文における張氏一族墓誌に対する引用は、全て前掲注1の文献資料によるものである。清寧四年秋八月十八日に至り、病で自邸にて没。礼して棺に入れて葬る…大安九年になり、雄武本郡の西北に改葬す、とある。
- 8) 咸雍十年二月二十五日に病にかかり、特に異変がなく、乃ち没。礼に従い、棺に入れる。右班殿直であり甥の世卿が、その生前の事を思い出し、有志と自邸にて相談して、家中のことが既に取まったが、先祖の墓は未だ広げぬ。大安九年になり、州の北に改葬し、之を持って孝敬を示す。
- 9) 大安四年の冬に、自邸にて没。大安九年になり、州の西北に改葬す。
- 10) 石田雅彦著『「茶の湯」前史の研究—宋代片茶文化完成から日本の茶の湯へ—』雄山閣、2003. P49. なお、宋時代における茶の種類について、『宋史』卷一八三食貨志下に記載がみられる。
- 11) 陸羽著『茶経訳注』上海古籍出版社、2017.

- 12) 注11参照。
- 13) 前掲注 1、P175.
- 14) 前掲注 5、P147.
- 15) 封演著、趙貞信校注『封氏聞見記校注』卷六「飲茶」、中華書局、2012.
- 16) 前掲注 5、P186.
- 17) 道教の吉祥文様の使用について、本稿では触れないが、張匡正の改葬を主導した張世卿の壁画墓における備経図には、はっきりと道教の『常清浄経』が描かれている。仏教と道教を同時に修行することは、恐らく北宋時代の三教合一という風潮の影響を受けていたと考えられる。詳しくは、前掲注 5 P221参照。
- 18) 前掲注 5 参照。「宣化遼代壁画墓群」『文物春秋』1995年第 2 期。宿白「宣化考古三題」『文物』1998年第 1 期。
- 19) 羅虬著「花九錫」。清時代・虫天子編『香艷叢書』所収、上海書店出版社、2014.

Discussion on the Murals Drawing Tea and Sutras Preparation in Tombs of  
Liao Dynasty at Xuanhua  
– Focused on the Tomb of Zhang Kuangzheng’s –

LI, Han

The excavation investigation of the mural tombs of Liao dynasty in Xuanhua area of Hebei province began from 1974, and 14 tombs were found by 1998.

This thesis takes the first excavation area of the mural tombs at Liao Dynasty in Xuanhua, that is, the Han nationality mural tombs at Liao Dynasty, as the research object, and focuses on the tombs of the Zhang Kuangzheng’s to carry out investigation and analysis. Zhang Kuangzheng is the ancestor of the Zhang family, and is greatly respected in the family. It is known from his epitaph that Zhang Kuangzheng was buried in the 4th year of Qingning (1058), and in 9th year of Da’an (1093) he was re-buried in present position.

Through analyzing the murals of Zhang Kuangzheng’s tomb and comparing with other four murals of Zhang family which were also buried in 9th year of Da’an, this thesis preliminarily analyzes the religious beliefs and the daily life of the local Families of Han nationality in the late Liao Dynasty, as well as the ceramics and metal daily necessities.

(美術史学専攻 博士後期課程3年)